

ようこそ！読みかたりの世界へ

〈おおぜいの子どもたちの前で読みかたりをする方へ〉



諫早市立図書館

◆ようこそ 読みかたりの世界へ

<はじめに>

一度でも経験のある方はお分かりだと思いますが、読みかたりは読み手にも聴き手にもたくさんの喜びを与えてくれます。

この喜びの源はいったいどこにあるのでしょうか？

テレビ・パソコン・携帯電話…。人と人が向き合って話さなくとも用がすんでしまうようなこの時代に「生身の読み手と聴き手が一冊の絵本を通して、じかに向き合う」という読みかたりには体温のぬくもりがあります。

この「ぬくもり」こそが、心に深い喜びを届けてくれるのかもしれない。

そして、子ども時代にたくさんの人と感動を共有することは、子どもたちの感性を高め「大人を信頼すること」や「豊かに生きること」につながっていくことでもあります。

また「絵や言葉を手がかりに自分の頭の中にイメージをつくる」という作業は、子どもの心に「想像力」という領域の土台を作り、広げていってくれることでしょう。

このように、読みかたりは得るものの多いすばらしい体験です。

そしていうまでもないことですが、主役は聴き手である子どもであり、本です。

もしも読みかたりが読み手の「発表の場」「自己実現の場」になってしまったならば、「よきもの」の大半は失われてしまうのではないかと案じます。

語り手である大人は得られるぬくもりこそを喜びとし、ひたすら聴き手である子どもに「よきもの」を届けることのみを願うべきではないでしょうか……。

「集団への読みかたり」の場合、つねにこの「なぜ読みかたりをしているのか」ということを確認することが大切です。これがしっかりしていることで方向がぶれないですむでしょう。

本の持つ力を信じ、謙虚に、素直な気持ちで子どもたちと向き合いたいものです。

何より、読みかたりは子どもにとって「大いなる楽しみ」です。

この「楽しみ」が、皆さんのお力でより多くの子どもたちにとってさらに身近なものとなりますように…。

◆読みかたりの実際

◇絵本を選ぶポイント

【集団で楽しむことに向いている絵本の条件(すぐれた力を持つ絵本の中で、さらに下のような条件を満たすもの)】

- ①ある程度の大きさがあること
- ②遠目のきく絵であること(→離れたところから確認するとよい)
- ③絵と文のバランスがよいこと
- ④絵と文の場面が合っていること

- ・信頼のおけるブックリストや書評誌を活用して選ぶ。
- ・なにより、自分が共感でき「読みたい」と思う絵本を選ぶことが大切。

◇事前準備

・下読み

→必ず声に出して読んでおく(→内容を把握することの他に、黙読では気づかないが「声に出すと読みにくい言葉」を重点的に練習するため)。このとき「本に破れや汚れはないか？」などもチェックしておく。

・開きぐせ

→特に新しい絵本はきっちりとつけておいたほうが持ちやすく、読みやすい。

1 表紙を開きます

片側の表紙だけを机の上に置いて、
上から下へギュッと押します。



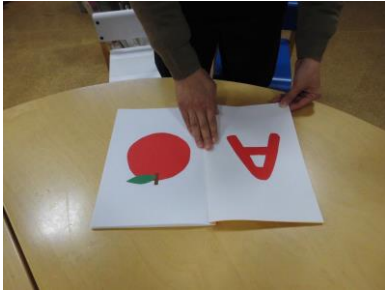
2 裏表紙も開きます

手を持ちかえて、反対側もギュッと
押します。



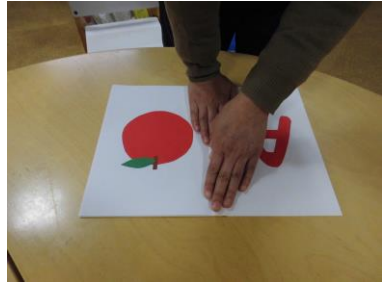
3 ページごとに

両端から数ページずつ取って繰り返します。



4 手のひらでしっかりと、

最後に手のひらでしっかりと押さえます。



・プログラムの組み方

※低学年で20～30分。高学年でも30～40分程度が集中できる限界。

→「いつ」「どこで」「どんな聴き手に」を把握し、組み合わせのバランスを考える(内容・長さ…など)。

→数名で読む場合は特に「自分が何を読みたいか」よりも全体のバランスのほうを優先する。

→「季節のものを選ばなくては」と考えるよりも「季節はずれのものを選ばないように」と考えるほうが選びやすい。

→手遊びや詩などを入れてめりはりをつけるのも効果的。

→ただし、パネルシアター、エプロンシアター、紙芝居などは絵本と性質が異なることをよく考えて取り入れること。

※学校での読みかたりで、特に初めてそのクラスに入る場合は、事前に担任の先生と打ち合わせをすることが大切。

→児童・生徒の事情で、(読む本の内容など)配慮したほうがよいことはないか？

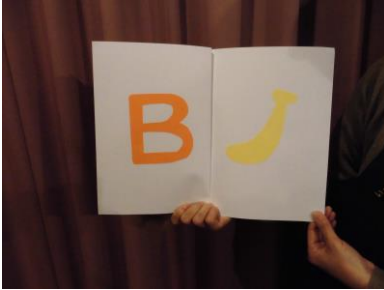
→目の悪い児童・生徒は前に座ってもらうこと。

→事前にあまり「お行儀よく」など強調しないように頼んでおく(読みかたりの場が「楽しいもの」ではなく「苦痛」になってしまわないように)。

• 本の持ち方

→基本は「ぐらつかせないように、しっかり持つ」こと。本の大きさ・形・右開きか左開きかによっても違ってくるので、本を選んだら持ちやすく見やすい持ち方を事前に試しておく。

※基本的な持ち方



親指で本の背を固定し、開いたページの下をあとの4本でしっかり押さえる。

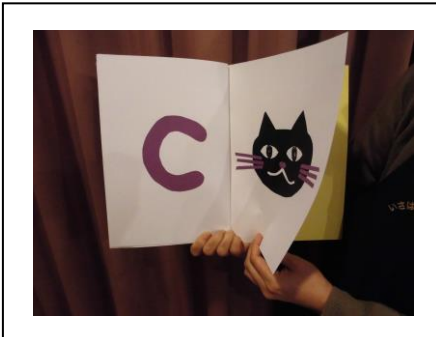
• めくり方

→けっして機械的にはめくらず、おはなしの流れにそってめくるスピードやタイミングを考える。

→めくる間もおはなしから心を離さない。

→聴き手は「絵を読んでいる」ので、めくった瞬間は読まない(一瞬の間をおく)。

→めくる時に腕で絵を隠さないように注意する。



・読み方

→「うまく読もう」と考えない。「届く声」と「間(ま)」を意識して、できるだけゆっくり、自然に読む。

オーバーな読み方は、本にではなく読み手に注意をひきつけるだけ。自分に酔うことがないように、主役はあくまで本であることを忘れず、作品の力を信じて手渡す気持ちを大切にす。

◇さあ 本番です

〈場の設定〉

- すべての位置の聴き手(特に両サイド)に本がきちんと見えているか？
一番前との距離は近すぎないか？
→扇型に座ってもらうのが一番見えやすい。
- 読み手の背景に動いたり目立ったりするものがないか？
→目立つものがある場合は布などでカバーする。
- 照明で本が光って見えにくくなっていないか？
→読み手の立つ位置や照明のオン・オフを工夫する。
- 窓からの外光は強くないか？
→強い場合はカーテンをしめる。
- チャイムや校内放送などの「外からの音」は大丈夫か？
→相談のうえ、小さくできるようならそうする(無理な場合は、音が鳴っている間はストップして待つ)。

〈注意したいこと〉

- 遅刻は厳禁→気持ちを切り替え、ゆとりをもって聴き手の前に立つためにも重要。
- まず挨拶…このとき聴き手の様子を把握する。
→集中しているか？もしざわざわするようなら手遊びなどで集中をうながす。
→すでに聴く態勢ができている場合は、よけいな前置きはないほうがよい。

- 絵本のほうばかり見ず、聴き手の様子を目や心で確かめながら読む。
→読みかたりはけっして「読み手からの一方通行」ではないことを忘れない。
- 聴き手からの反応(質問など)に答えすぎると、皆の注意が本から離れていってしまうので、ほどほどにする。

◇読みかたりの後で

- 「おもしろかった？」など、むやみに感想は聞かないほうがよい。
→余韻を大切に。感動はひとりひとりの胸の中に…。
→ただし、何か言いたそうな場合には聴いてあげる。
- 記録は必ず残す
→「日付」「場所」「プログラム(→書名・著者名・出版社)」「聴き手の反応」「読み手の感想」…など。
※その日の状況によって左右される部分もあるし、思わぬアクシデントが起きることもある。一回一回「うまくいった」「だめだった」と一喜一憂する必要はない。
※記録を残すことによってレパートリーを把握し、うまくいった点いかなかった点を客観的に反省し、次に活かすことが大切。

◇その他 気をつけたいこと

- 児童生徒のプライバシー
→子どもたちの様子など、不用意に外で話さないこと。
- 著作権
次のようなものを作りおはなし会などで使用する場合は、出版社(窓口)へ連絡し著作権者・出版社の許諾を得ること。

1. 絵本・紙芝居の“拡大使用”
(複製を伴う場合)
 2. ペープサート
 3. 紙芝居
 4. さわる絵本
 5. 布の絵本
 6. エプロンシアター
 8. 人形劇
 9. パワーポイント
 10. その他、いかなる形態においても
“絵や文章を変形して使用する” 場合
- 家庭で楽しむ以外は
非営利(お金を取らない)
でも許諾が必要

『読み聞かせ団体等による著作物の利用について』より
→<http://www.jbpa.or.jp/ohanasikai-tebiki.pdf> 参照

※わからないことがあれば、図書館にご相談を！

◆おはなし会の“???”を解決！

Q1. 読み語りをしてみたいと思いますが、できるかどうか不安です。

- A. 読み語りは、特別な技術が必要なわけでもなく、向き不向きがあるわけでもありません。本が好きな人で、子どもに読んであげたいと思うなら誰でもいつでも始められます。ただし親子で楽しむ時とは違い、不特定多数の子どもへのおはなし会を開く場合は、いくつかポイントを押さえ、準備をする必要があります。⇒（「読み語りの実際」参照）はじめは上手いかわからないこともあるかもしれませんが、徐々に慣れてきます。次回へ反省をこめて記録しておくことも忘れずに。一人では気づかないことも人に聞いてもらうことやグループで聞きあって意見交換することでわかることもあります。

誰のためのおはなし会なのか、誰のために読んでいるのかが慣れてくるとしだいに忘れてしまいがちになるので気をつけたいものです。

Q2. 子どもたちがおはなし会に集中してくれないとき、どうする？

- A. 読み手の背景や周りに何か動くものや気になるものはありませんか？部屋が暑すぎたり、寒すぎたりしていませんか？集中しない原因をさがして取り除きましょう。途中、息抜きに手遊びやわらべうたを取り入れてもいいでしょう。それでもうまくいかないようなら選書やプログラムをもう一度見直してみてください。⇒（「読み語りの実際」参照）

読んでいる最中に立ち歩いたり、おしゃべりしたり寝転がる子がいてびっくりすることがありますが、案外そうしながら聞いているものです。焦らずに「聞くことは心地よい、楽しい」ということがわかるような体験を積み重ねていくことが大切です。

Q3. おはなしの途中で声をかけてくる子どもがいるのですが・・・

- A. 聞いている途中で「それ知ってる、知ってる」「あのね、あのね・・・」と話しかけてくる子がいます。お話に夢中になったためや聞くのに飽きてしまったせいかもしれません。そんな時、叱ったり無視をせずに

「聞いているよ」と目線を送ってみましょう。それでも続ける時は「そうね。あとで聞かせてね。」と言ってから読み進めてみてください。

Q4. 手遊びが苦手なのですが、必ずしなくてははいけませんか？

A. 子どもをひきつける一つの方法として手遊びが効果的な場合もありますが、必ず入れなければいけないものでもありません。無理して入れるよりもかわりに遊びの要素のある本をプログラムの中に入れる、相手をほめる会話をする事など、聞き手とコミュニケーションをとる方法を取り入れてみましょう。

Q5. 本の作者名は読んだ方がいい？

A. 読む読まないの決まりはないかと思えます。ただし聞き手が幼い場合作者という意味を理解できなかったり、おはなしの世界にそのまま入り信じる子どももいるので、作者がいることへの抵抗があるかもしれません。逆に高学年などは、きちんと伝えることで作者の他の作品へ広がります。

Q6. おはなし会にパネルシアターやエプロンシアター、紙芝居などを入れてもよいですか？

A. プログラムの流れを考える時、ポイントになるよう入れることもできます。楽しく子どもをひきつけることができるのでどんどん入れたいと思うかもしれませんが、おはなしを通して子どもを本の世界に出会わせてやるのが大切なので、読み語りを中心にその流れの中に入れてみましょう。また、実際に取り入れる時にはそれに合ったやり方を十分練習することが必要になるでしょう。

最近では大型絵本の出版も増え、おはなし会に使うことも多くなっています。しかし、手をもって読む本とは違い形も大きく読みにくくめくりにくいことなどから、そちらに気をとられおはなしがうまく伝わらないことがないような注意が必要です。少人数には向かないでしょう。

